

テーマセッション1「出生への歴史文化的要因の影響：2026年のえうまを前にして」

1966年丙午(ひのえうま)による
期間/コホート出生力への人口学的影響

The Demographic Influence of the Hinoe-uma 1966
on Periodal/Cohort Fertility

第1日 2025年6月7日(土) 9:00~11:00
A707 第77回日本人口学会大会(福岡大学)

日本医科大学 特任教授・札幌市立大学 名誉教授
原 俊彦

1

はじめに

丙午(ひのえうま)の人口学的意味

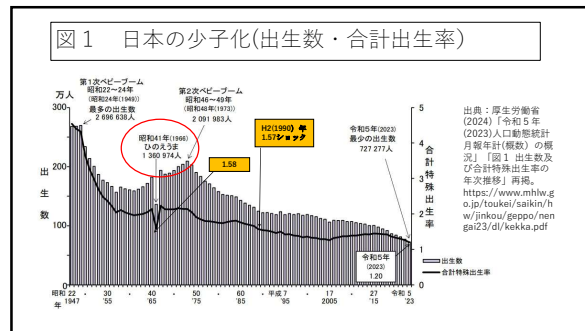
丙午は60年周期で観察可能な歴史的社会実験として捉えることができる。

形式人口学的には、歴史文化的要因によって、丙午の前後の年次における「期間変動」のその年次を通過する出生コホートに沿った「コホート変動」が観察される点にある。

ここでは長期の各年各年齢別データが入手可能な「1966年丙午」について、出生率別出生率のサーモグラフ(出生率の等高線グラフを温度変化で表現したもの)を用いて観察した結果を報告するとともに、その意味について考察する。

*なお、本報告は、2024年11月21日「2026年ひのえうまに向けて過去から学ぶ」(国立社会保障・人口問題研究所セミナー)の討論資料として、コメントを準備するために過去の研究を再検討したところ、思わぬ発見もした結果であり、貴重な機会を頂いたことに、改めて謝意を表します。

2



4

2. 年齢別出生率のサーモグラフ

丙午の人口学的意味は、丙午の年の前後における「期間変動」と、丙午の年に生まれた出生コホートに沿った「コホート変動」が観察される点にある。

- ・1966年の丙午の期間変動については、サーモグラフ(出生率の等高線グラフを温度変化で表現したもの)で観察可能。
- ・コホート変動についても、年齢各歳のグラフにスパイク状に何か現れるはずだが、こちらの方は、むしろ戦後世代(団塊の世代の最後1947年まで)と戦後世代(1948年以降)に明確な変化が見て取れる。
- ・戦後の第二の出生減退は、戦後世代の出生コホートに沿った「コホート変動」で説明できるのではないかな？

5

年齢別出生率のサーモグラフ

図3 年齢別出生率の立体等高線グラフ

①年齢別出生率の時系列表を作成する。
縦軸：年齢(15~49歳)
横軸：年次(1947年~2001年)
垂直軸：年齢別出生率

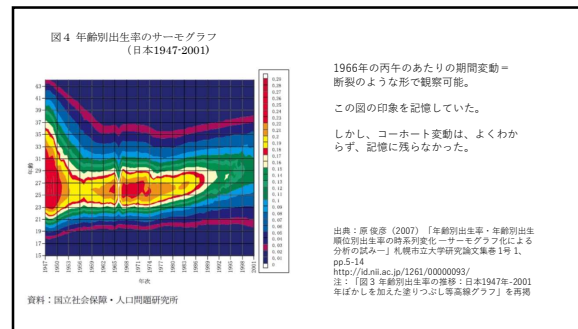
②立体等高線グラフを作成する。
垂直軸の年齢別出生率(0.02刻み)
→地形図のようなものができる。

③立体等高線グラフを等高線グラフにする。
→出生率の水準が同じ高さの年次年齢を等高線が結んだ地図のようなものができる。

④気温や体温の分布に類似させて彩色する(低い→高い、青い→赤い)

原 俊彦(2007)『年齢別出生率・年齢別出生率別出生率の時系列変化―サーモグラフ化による分析の試み―』札幌市立大学研究論文集第1号1, pp.5-14
<http://id.nii.ac.jp/1261/00000093/>
注：『図1 年齢別出生率の推移：日本1947年~2001年立体等高線グラフ』を再掲。

7



8

1. 期間変動とコホート変動の指標

□丙午(ひのえうま) = 60年周期で回ってくる女兒の出生を回避(きひ)する歴史文化的要因

- ・男児選好・女兒の回避→出生性比の上昇
- ・出生の回避→出生数・出生率の低下(前後の年次間での変動)

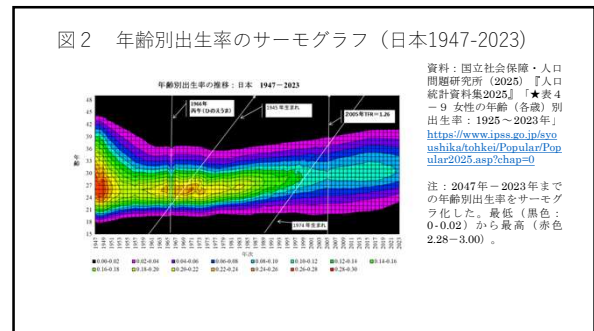
□出生率変動の指標

- 期間変動→期間合計出生率 (TFR = PTFR)
- コホート変動→コホート合計出生率 (CTFR)

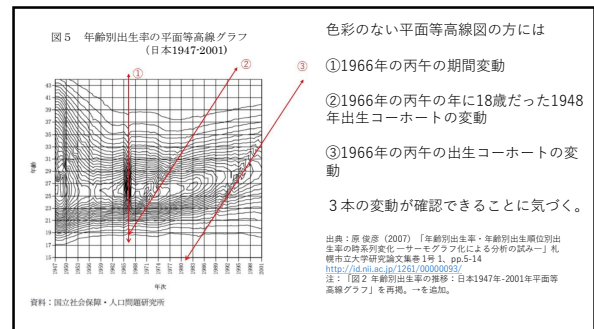
□日本の戦後の少子化との関係

- ・第1次の出生減退(1950年代) 期間変動(年次)
- ・第2次の出生減退(1975年以降) コホート変動(出生年次)

3



6



9

1966年の丙午の期間変動とコホート変動

- 1966年の期間変動：18歳から38歳まで広範な年齢での出生率低下が起きている
⇒TFR（PTFR）の低下。特に低年齢（第1子）と高年齢（第2子以上）の低下が大きい。
- 1966年に18歳であった1948年出生コホートで出生率の継続的な落ち込みがあった
⇒CTFR（完結出生力）の低下
- 1966年出生コホートの変動も1966年+18歳=1984年で1984～1986年から始まっている。
⇒CTFR（完結出生力）の低下。

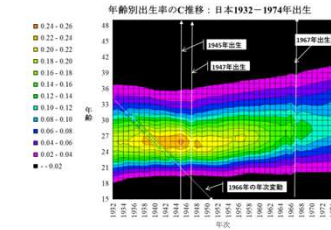
*2と3は、18歳時の出生率低下が高年齢にも波及すること。また18歳時のコホートの人口規模の縮減によって出生率低下が発生し、その影響は高年齢にも波及することを示唆している。

⇒晩婚・晩産化（タイミングの遅れ）と出生力低下の関係を示唆しているのではないかな？

★以上は、平面等高線図から読み取ったものであり、数値データで確認する必要がある。

10

図6 コホート年齢別出生率のサーモグラフ
(日本1932～1974年出生)



コホートの変化は90度方向であり、変化が発生する年次は微妙にズレる。
たとえば1966年出生コホートではなく1967出生コホートでの低下となる。
逆に1948年コホート（1966年に18歳）ではなく、1947年コホート（1966年に19歳）の低下になる。
また1966年に24～34歳の再生産年齢であった箇所に、期間変動の印が現れる。

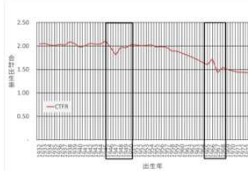
国立社会保障・人口問題研究所(2025)「人口統計資料集2025」
<https://www.ipss.go.jp/yushika/tuhkei/Popular/Popular2025.asp?chap=0>
★表4-1 0 女性のコホート別出生率：1947～2023年より作成

11

3. 完結出生力の低下はどのように起きるのか？

- (1) コホート合計出生率の推移

図7 コホート合計出生率（CTFR）
(1932-1974出生)



資料：国立社会保障・人口問題研究所(2025)「人口統計資料集2025」★表4-1 0 女性のコホート別出生率：1947～2023年より作成・作表した。

CTFRの低下は、1947年出生（1966年19歳）と1967年出生（1986年19歳）で起きている！

表1:CTFRが対前年より0.1以上変動した出生年前後

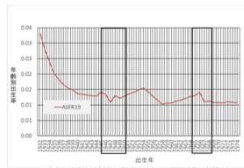
出生年	15歳時	19歳時	CTFR	対前年の差分
1945	1960	1964	2.10	0.07
1946	1961	1965	1.97	-0.13
1947	1962	1966	1.81	-0.16
1948	1963	1967	1.95	0.17
1949	1964	1968	1.95	-0.02
1950	1965	1969	2.03	0.07
*	*	*	*	*
1965	1980	1984	1.40	-0.06
1966	1981	1985	1.73	0.13
1967	1982	1986	1.43	-0.30
1968	1983	1987	1.54	0.11

出典：国立社会保障・人口問題研究所(2025)

12

(2) 19歳時のコホート年齢別出生率の変化

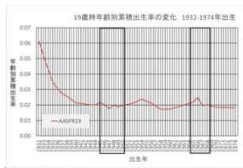
図8 19歳時年齢別出生率の変化
(1932-1974出生)



資料：国立社会保障・人口問題研究所(2025)「人口統計資料集2025」★表4-1 0 女性のコホート別出生率：1947～2023年/★表4-1 1 女性のコホート別累積出生率：1947～2023年より作成・作表した。

1947年出生（1966年19歳）と1967年出生（1986年19歳）で出生率の一時的な低下が確認できる。

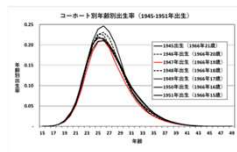
図9 19歳時年齢別累積出生率の変化
(1932-1974出生)



13

(3) コホートの年齢別出生率の変化（1945～1957年出生）

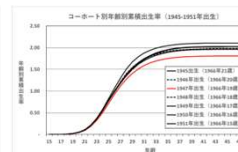
図10 コホート年齢別出生率
(1945～1951年出生)



資料：国立社会保障・人口問題研究所(2025)「人口統計資料集2025」★表4-1 0 女性のコホート別出生率：1947～2023年/★表4-1 1 女性のコホート別累積出生率：1947～2023年より作成・作表した。

1947年出生（1966年19歳）の年齢別出生率と累積出生率は前後のコホートより低く推移。

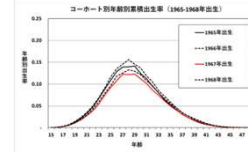
図11 コホート年齢別累積出生率
(1945～1951年出生)



14

(4) コホートの年齢別出生率の変化（1965～1968年出生）

図12 コホート年齢別出生率
(1965～1968年出生)



資料：国立社会保障・人口問題研究所(2025)「人口統計資料集2025」★表4-1 0 女性のコホート別出生率：1947～2023年/★表4-1 1 女性のコホート別累積出生率：1947～2023年より作成・作表した。

1967年出生（1986年19歳）の年齢別出生率と累積出生率は前後のコホートより低く推移。

15

(5) なぜ、1966年出生ではなく、1967年出生なのか？

表2 年齢別性比（1964～1968年出生）

	総数	男	女	出生性比	1歳年上性比
1964	1,716,761	882,924	833,837	105.9	1.02
1965	1,823,697	935,366	888,331	105.3	0.99
1966	1,360,974	705,463	655,511	107.6	1.43
1967	1,935,647	992,778	942,869	105.3	0.75
1968	1,871,839	967,996	903,843	107.1	1.10

表3 年齢別初婚率（1965～1968年出生）

出生年	1966	1967	1968
19歳	16.9	12.4	13.4
20歳	29.2	23.0	24.7
21歳	42.6	34.6	37.4
22歳	61.0	49.4	53.8
23歳	81.6	68.6	73.8

16

1966年の丙午によるコホート変動

- A:1966年に19歳であった1947年出生コホートとB:1986年に19歳であった1967年出生コホートで完結出生率の低下が起きている。
- いずれも19歳時の出生率低下=第1子出生率の低下⇒第2子以降の出生率低下=完結出生率の低下が起きた。
- Aは丙午の期間変動の19歳のみ。Bでは先行する1966年コホートの規模縮小により、1967年出生コホートの1歳年上との性比の低下（女性>男性）⇒女子年齢別初婚率の低下⇒年齢別出生率・累積出生率・完結出生率の低下が起きた。
- 1966年コホートでは逆の動きとなり完結出生率はむしろ上昇している=丙午の年に生まれた女性と結婚すると家が減るという迷信とはむしろ逆の現象が起きている。

17

丙午の迷信の起源についての仮説

- 丙午の年が女兒の出産を忌避するものであったとすれば、丙午の年の出生性比は高くなる⇒1歳年上性比はさらに高くなり、女性の婚姻には極めて有利な状況⇒女性の希少性が増し、つまり、生涯売り手市場となる。つまり、女性はおそらく（結婚には）強気の女性が増えるのではないかな？
- 保守的な社会では、強気の女性が家を減らす？と思われることがよくあり、経験的に丙午に生まれた女性には強気の人が多いことから、「丙午の女性は家を減らす」という迷信が生まれた。
- 当初は、たまたま女兒が極端に少ない年（性比が高くなる）があり、その年がたまたま丙午の年で、性比の上昇から結婚に強気の女性が多くなったという現象が、案外、この迷信の起源なのかも知れない。

18

4.まとめと考察

- 1. 1966年の丙午は、同年の年齢別出生率の期間変動と、同年に19歳であった1947年出生と1986年に19歳であった1967年出生のコーホート変動をもたらした。
- 2. 同年の期間変動（低下）は女性の出生を回避する歴史文化的要因によるものといえるが、基本的には前後の出生変動により相殺されており、出生タイミングの一時的調整であり、実質的な出生動向への影響は殆どないといえる。
- 3. これに対しコーホート変動は、19歳時の出生率低下を通じ以降の年齢別出生率・累積出生率を低下させ、コーホートの完結・出生率の著しい低下を招いた。つまり、若年出生率の低下・出生タイミングの遅れ（晩婚・晩産化）が完結出生率の低下をもたらすことを示唆している。
- 4. この効果は今日より19歳時の出生率が高かった頃のものであり、すでに晩婚・晩産化が進んでしまった「2026年の丙午」では観察されないのではないかと思う。

参考文献

黒須里美(1992) 弘化三年ヒノエウマ：文化と人口の地域性 『日本研究』第6集 国際日本文化研究センター紀要、pp.35-55
坂井博通(2024) 縁起かつぎと出生の関係ー出生年月日時刻データから2026年丙午を考えるー。国立社会保険・人口問題研究所「2026年ひのえうまに向けてー過去から学ぶ」報告資料（事前）
国立社会保険・人口問題研究所(2025)「人口統計資料集2025」
<https://www.ipss.go.jp/eyoushika/tohkei/Popular/Popular2025.asp?chap=0>
林玲子(2024) 「2026年の丙午（ひのえうま）に向けて推移と展望」日本人口学会 2024年度第1回 東日本地域部会 2024年9月21日 報告資料
速水巖(1986)「明治期統計にみる有配偶率と平均結婚年齢」三田学会雑誌19巻3号265～277
Hajnal,John (1965) "European Marriage Patterns in Perspective". in Glass, Eversley, eds.,Population in History, Essays in Historical Demography. London: Edward Arnold.
原俊彦(2007)「年齢別出生率・年齢別出生順位別出生率の時系列変化ーサーモグラフィ化による分析の試みー」札幌市立大学研究論文集巻1号1巻pp.5-14.
<http://id.mii.ac.jp/1261/00000093/>

原 俊彦（はら としひこ）
日本医療大学（特任教授）・札幌市立大学（名誉教授）
E-mail：thara@scu.ac.jp, <http://toshi-hara.jp>